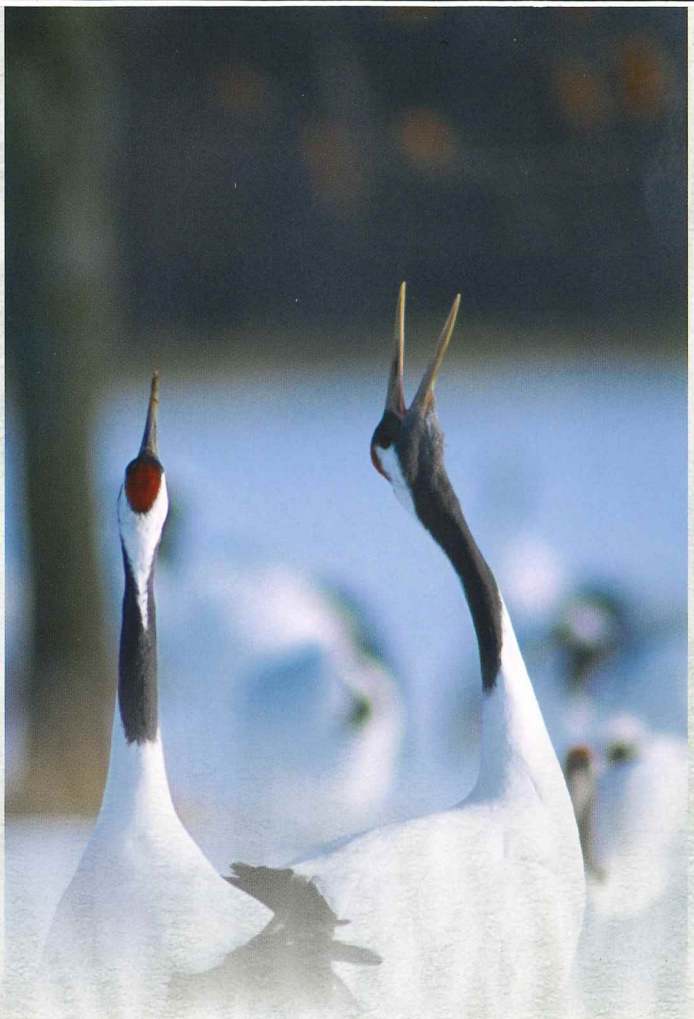
令和五年一月一日発行　毎月二回一日発行

書道研究誌

書の光



1
2023

Vol.653

宮城野書道会

變化齊一（「荘子」天運）

謹賀新年

『變化齊一』とは、変化する中にも一貫性があることを言います。書作品においては変化と統一という一見相反すると思われる要素を活かすことは非常に重要なことです。また荀子の言葉に「應變」があり、これは周囲の環境の変化に応じて行動することによって行き詰ることがないことを言います。絶え間なく変化する生活環境のなかで、変化に対応することが求められますが、同時に一貫性のある信念を持つこともまた必要なことと思います。

今年八月に開催予定の本会主催の宮城野書道展は五十回展を迎えます。『變化齊一』で言えば、書を取り巻く社会環境の変化はありましたが、長期にわたって社中展を開催し弊誌を発行できたことは、何よりも多くの方々のご支援の賜であり、心より感謝申し上げます。

今年も、書を通じて様々なことを学び、全会員が楽しく心豊かに書に親しむことができますことを目標にして全力を尽くします。

もう一つの目標は、書文化のさらなる拡がりです。書作活動は楽しみとともに苦労も多いものですが、助け合い、壁を乗り越えて前進しましょう。さらに古典に親しみ、芸術文化の世界に目を開き、大きな視野で未来の書を展望したいものです。

最後になりましたが、皆様のご健康、ご多幸そしてご健筆をお祈りいたします。

令和五年　元旦

宮城野書道会　代表　佐藤　象雲

天地私（わたくし）無く春又帰る

《大意》天地陰陽の気は公平無私であるから春は時を違わずにまた来た。

兎（うさぎ）は赴（おもむ）く千山の雪　鷹（たか）は飛ぶ万里の風

《大意》兎は積雪深き重なり連なる山に走りゆき、鷹は元気よく万里の風を衝いて（曹秋岳）

読み　奇を玩（もてあそ）んで遠きを覺えず（かわった景色の面白さに、道のりの遠きも覚えず）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩
「藍田山の石門精舎」（前半）

落日山水好
落日　山水好し
漾舟信歸風
舟を漾わせて　歸風に信す
玩奇不覺遠
奇を玩んで遠きを覺えず
因以緣源窮
因りて以て源を緣ねて窮む
遙愛雲木秀
遙かに雲木の秀でたるを愛し
初疑路不同
初めは路の同じからざるかと疑う
安知清流轉
安んぞ知らん　清流轉じて
偶與前山通
偶々前山と通ずるを
捨舟理輕策
舟を捨てて輕策を理む
果然愜所適
果然として適する所に愜う
老僧四五人
老僧　四五人
逍遙蔭松柏
逍遙して松柏に蔭う

（後半に続く）

行書

草書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隷書

因りて以て源を縁ねて窮む

ペン字部課題　（1月31日〆切）　細字部課題　（1月31日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

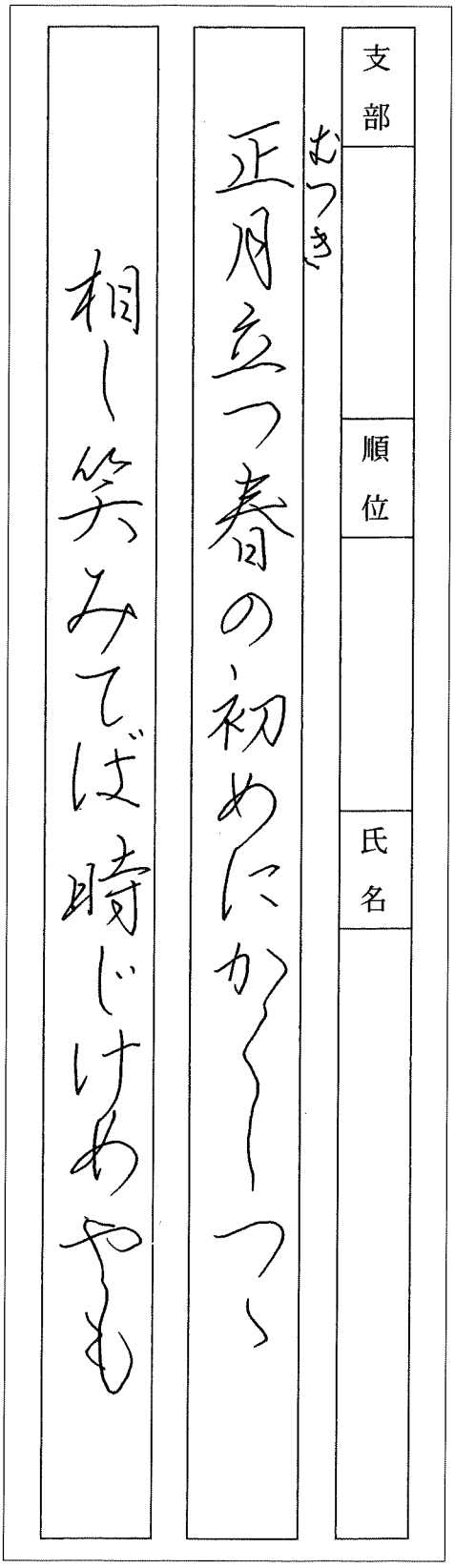
佐藤象雲書

音　シンセキコキュウ
ロウショウイリョウ

略解　親戚など古いなじみは交情を温めるべきで
老人と少年は各々その食べ物を別にすべきだ

正月立つ　春の初めに　かくしつつ　相し笑みてば　時じけめやも

《大意》　正月の春の初めにこんなふうに　みんなでともに笑いあうというのは　まさにこのときならではのこと



大伴家持

和泉溪石先生書

高祖は命を受け（漢中に興る。）

象雲臨

■石門頌（せきもんしょう）（後漢・西暦一四八年）の臨書 (5)

『高祖受命』

今月の四文字でとくに印象的な字は、なんといっても縦画が長く伸びた「命」です。この石門頌では「誦」の終画も長く伸ばしています。ほかの古典でこのように下垂を長く伸ばす字形の例は、前漢の「魯孝王刻石」の「年」をはじめ、木簡などにも見ることができ珍しいものではありませんが、この石門頌以降の碑では殆ど見ることが出来ません。

長く伸ばす意味とは何なのかは、昔から様々な見解がありますが大きく二つ挙げられます。まず一つは、その文字を強調するために長く伸ばしたということです。今回の「命」は漢の始祖である高祖が天命を受けたという王朝の創始を意味する重要な句で、字義を強調するためというものです。そして次に考えられることは、深い意味はなく、単なるアクセントやリズムに変化を持たすための手段だという見方です。何れが妥当なのか現在では決め手とはなっていませんが、私たちが学ぶ上では、非常にゆったりとした趣があって楽しく感じます。

豪（ごう）
釐（り）

象雲臨

■王羲之・集字聖教序（唐・西暦六七二年）の臨書 (19)

『豪釐』

『豪釐』とは、ほんのわずか、微塵の意味です。「仏道はこれを大きくすれば宇宙にあまねく広がり、これを細かくすれば微塵のなかにおさめられてしまう。」という一節にある二字です。二字とも画数が多い字ですが、字画が上下に重なり合う字で難しい結体です。

左に掲げたものは趙孟頫の書いた「豪」と、米芾の「釐」です。

昨年の「書の美について」（11・12）で米芾と趙孟頫を取り上げていますが、米芾は人々から「集古字」と言われたほど古典を追求した人で、一方、趙孟頫は復古主義を掲げて元代に王義之書法を復活させたといわれる人です。

集字聖教序の「豪」は頭部を大きくして、下部は小さめに点画を簡便にして空間を明るく保っています。これに対して趙孟頫の字は上下中心を整え、線の分間もほぼ均等で、王義之書とは似て非なるものです。一方、米芾の「釐」は王義之の結体とは異なりますが、上部を大きくして、下部の左払いを長く切り込んで、その右に「里」の下部二横画を短めにして、各部位を活かしあって形こそ違いますが、王義之書法に忠実です。二人とも古典主義に違いないのですが、この二人の書人の王義之の捉え方の違いは大きな参考になります。

元　趙孟頫

米　芾